



日：令和2年2月13日
場：袋井市役所4階「庁議室」

「挑戦する人を応援するまちづくり」は 地方創生の実現に向けた重要なメッセージ

論点

「挑戦する人を応援するまちづくり」
市が果たすべき役割とは？

Keyword

「一人ひとりがオールを漕ぐ時代」
「行政のお墨付き」「ふくろい人」

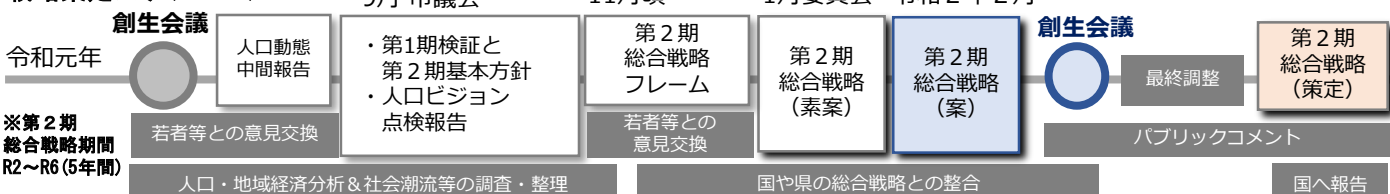
第2期 輝く“ふくろい”
まち・ひと・しごと創生総合戦略
【計画期間：令和2年度～令和6年度】

(案)

令和2年 月
袋井市

- 市民の小さな成功体験を積み上げていくことが大切。自分にもできた有能感、地域や人の役に立っている有用感が、新たなチャレンジと地域の愛着を生む。
- 想いをカタチにしたいと思っている人は、補助金等の支援よりも、やりたいことに対する共感など、行政のお墨付き（後押し）と挑戦できる環境に魅力を感じる人が多い。
- 行政が信頼性を担保に、新たな繋がりを生む場づくりやハブとなる役割を担えば、そのまちには「新たなチャレンジをする人々」が集い、活躍するのではないかと。
- 主体的にふくろいに関わる「ふくろい人」というコンセプトは新しい。未来を感じる。

戦略策定スケジュール

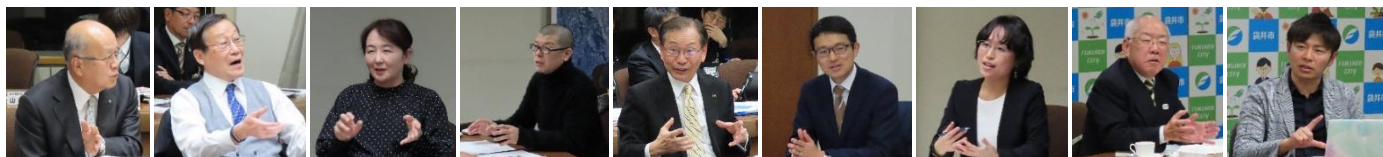


※第2期
総合戦略期間
R2～R6(5年間)

創生会議「ふくろい部会」での主な意見

輝く“ふくろい”まち・ひと・しごと創生会議「ふくろい部会」メンバー

株式会社杏林堂薬局	代表取締役	青田 英行	袋井市観光協会	会長	谷 敦
Realabo（食と子育てを楽しむサークル）	代表	足立 美和	袋井商工会議所	顧問	豊田 富士雄
宗教法人法多山尊永寺	住職	大谷 純應	静岡産業大学 経営学部	学部長	丹羽 由一
日本貿易振興機構（JETRO浜松）	所長	志牟田 剛	静岡理科大学	学長	野口 博
株式会社THE BLUE OCEAN	代表取締役	竹原 興紀	学校法人山名学園 山名幼稚園	理事長	諸井 理恵



1 挑戦する人を応援するまちづくり

- ▶ 袋井駅前の空き店舗を利用し80年代のディスコを期間限定で復活させる「ディスコナイト」を開催した。観光協会青年部を中心に初めて挑戦し、カタチにできた成功体験が、「次はもっと、こうしたい」という思いが湧くなど内発的動機付けに繋がった。
- ▶ この取組の成功要因は、①企画・運営に対する自己決定感のほか、②実際にカタチにすることができた有能感、③成功するか否か、実績のない新たな取組・挑戦に対し理解を示してくれた家主や地域、観光協会や行政（市・警察）の協力があつたからだと思う。
- ▶ これからの行政運営は、補助金による財政的な支援だけでなく、取組に共感し、お墨付きを与えたり、共に創り上げる姿勢で、挑戦する人を後押しをしていく仕組みづくりが求められている。
- ▶ このまちで暮らしたいと思う気持ちは、地域に役立っているという「地域での自己有用感」が大きく関係している。小さな成功体験を積み上げていくことで「ここで暮らす意義」を自ら発見し、「住人」から「まちづくりに主体的に関わる人」に変わると思う。
- ▶ 子育て世代や学びのサークルなど、「共感」で繋がるグループが増えている。人と人が繋がり、語らう場（コワーキングスペースやシェアオフィス）があつたら嬉しい。
- ▶ 企業も地域と繋がりたい（リアルな課題や生活者の生の声に触れたい）貢献したいという要望がある。行政は仲介役を担い、そうした情報を集約して情報提供してくれる仕組みがあると良い。
- ▶ 子どもたちが自分達のチカラで運動会を作り上げる挑戦をしている中学校が市内にもあり、素晴らしいと感じた。自ら考えて挑戦することが、自己有用感に繋がる。

2 「ふくろい人」人づくりの挑戦

- ▶ この街に住む人だけでなく、よそ者を含めて袋井市のまちづくりに主体的な関わりを持つ「ふくろい人」を増やしていこうという考え方はとても良い。取組の広がりや未来を感じる。
- ▶ 多様な主体が袋井を舞台に活躍するためのプラットフォームの役割を果たす行政であってほしい。
- ▶ 技術の進展や働き方の多様化などにより、フリーランスを中心に、働く場所を定めず（住む場所を自由に変えながら）仕事する人が増えてきている。
- ▶ 地域課題を解決するアイデアを国内外から募り、そのアイデアを地域の人々との対話のもと、磨き上げながら試行錯誤できる実践フィールド（場づくり）が実現できれば、ふくろいに協力してくれる人を増やすことに繋がる可能性は格段に広がる。
- ▶ 「この人みたいな生き方をしたい」という憧れる人に若者は、影響を受ける。この街に関わる人の暮らし方や生き方も含めて、『ふくろい人』を育て、創り出すことは、今後のまちの魅力を増やすと強いコンテンツになると思う。

3 「しっかり稼ぐ」しごとづくり

- ▶ 新技術の活用はどの企業においても必須。半歩でもリードしたいと思ったときの身近で頼もしい相談役は、理工科大学である。
- ▶ 大学と商工会議所が連携した「チャレンジプレイス」では、起業のほか、売上向上などの取組を引き続き支援していく。
- ▶ 大学との連携を強化し、地域産業のイノベーションを促す取組は、これまで以上に必要となり、大いに期待したい。
- ▶ 観光も広域で取り組む時代。森町や豊橋市などからも一つの圏域として、共に観光に取り組みたいというお話がある。
- ▶ アグリツーリズムやスポーツツーリズムなど、地域資源を全て観光に繋げ「地域の稼ぐ力」を高めたいが、地域内消費を高める受入れ体制（宿泊・食・土産）が十分ではないことが課題。
- ▶ 製造業をはじめ、事業継承の問題は「待ったなし」の状態。他方、若手経営者（Y E G）が「自分ゴト」としてまとめた提言は評価できる。ぜひ皆さんも、応援してあげてほしい。
- ▶ 理工科大学に新たに土木学科を設置する予定。建築やデザインを含め、まちをフィールドに学びを深めるほか、お理工塾などの活動でも、小学生と大学生との繋がりを作るなど実体験を増やしていきたい。
- ▶ 目利きが大事。あらゆる分野に「デザイン思考」を浸透させていくことが大事。また、プロフェッショナル同士がマッチングする機会の創出（場づくり）が重要。
- ▶ 「引き算の経営」が大切であると実感している。労働力が縮小していく中、店の魅力を高め、人の共感を呼ぶためには、あれこれ手を広げるよりも、こだわりを持って絞り込む経営戦略が顧客満足度と従業員のモチベーション維持・向上に効果的。

4 「支え合い」まちづくりの挑戦

- ▶ 幼稚園をアートの場にして、展示会やワークショップなどを通じて創造性を育みたい。幼稚園児と中学生を絵本で繋げるなど「斜めの関係づくり」も必要だと感じている。
- ▶ 住んでみたら良さを実感するが、10年以上定住している若者は少ない。新旧住民の意見をバランス良く聞いた方がよい。
- ▶ 人生100年時代。セカンドステージをどのように楽しみ暮らせるかが重要。おじいさん、おばあさんも楽しめる街づくりを。
- ▶ 祭りは、この地域にとって特別な存在であり、チカラを持つ。小学生も自分が暮らす地域の屋台の鉄砲提灯を知っている。外国人市民も一緒に祭りができるような街にしていきたい。
- ▶ 「地元に戻りたくない、居たくない」と感じてしまうのは、給料ではなく、学びや遊びの場のほか、切磋琢磨する仲間との出会い、新しいことに挑戦できる環境など、「この街は働きながら、こういうこともできる」といった自己実現に対する期待を抱くことができない環境が大きな要因だと思う。